左京三条一坊の調査

―第314-7次

1　はじめに

調査地は、奈良市二条大路南２丁目175他に所在し、平城京左京三条一坊七坪の東辺中央にあたる。駐車場として利用されていたが、店舗を新築する計画があり、事前調査をおこなった。調査区は建物建設部分を中心に東西18m、南北16mの範囲で設定し、調査面積は288㎡である。調査期間は2000年７月３日から８月４日。

なお本坪では、これまで奈良市教育委員会が１カ所、奈文研が７カ所の調査をおこなっている（奈良市第38次調査、平城宮第231次・234－16次・242－8次・258－2次・258－5次・269－5次・303－4次）。今回の調査地は、南辺が第242－8次調査区の北辺と接し、第269－5次調査区の西に位置する（図122）。

2　基本層序

本調査区の基本的な層序は、現地表から駐車場造成のための客土、耕作土である黒色砂質土、床土である橙灰褐色砂質粘土、地山である黄灰白色シルト質粘土となる。地表面は標高63m前後、遺構検出面である黄灰白色シルト質粘土層の上面は最も高いところで62.2mである。

3　検出遺構

遺物包含層である耕作土・床土掘削後、地山面で掘立柱建物、流路、井戸、土坑、柱穴、石列などを検出した（図123、124）。以下に主な遺構について記述する。

SB6085　第242－8次調査の調査区北部で検出した南北棟掘立柱建物の北妻柱列を確認し、梁行２間（3.6m）桁行３間（5.4m）、柱間各６尺等間であることが確定した。東北隅の柱穴がSD6100の埋土を掘り込んでいることも前回の知見と同様である。

SD6100　第242－8次調査で検出した流路の上流部分にあたる。本調査区内を北西から南東に向けて対角線上に幅約５mで南流する。南岸では溝肩に黄色粘土が置かれており、護岸的な作業のなされた可能性がある。埋土中には土器・瓦など多量の遺物を含み、特に南北の溝肩にそって遺物の出土が集中する傾向が認められた。埋土下層の暗褐色粘質土、灰色砂質土中より平城Ⅳ・Ⅴの土器類が、上層の灰褐砂質土中より平城Ⅴから平安期の土器類が出土している。

SE7790　SD6100の基底部で検出した一辺80cmの方形縦板組の井戸。板の上端を合掌状につぶして廃絶していた。各辺に幅20cm以下、最大残存長167cm、厚さ１cm程の板材を10枚前後ならべている。

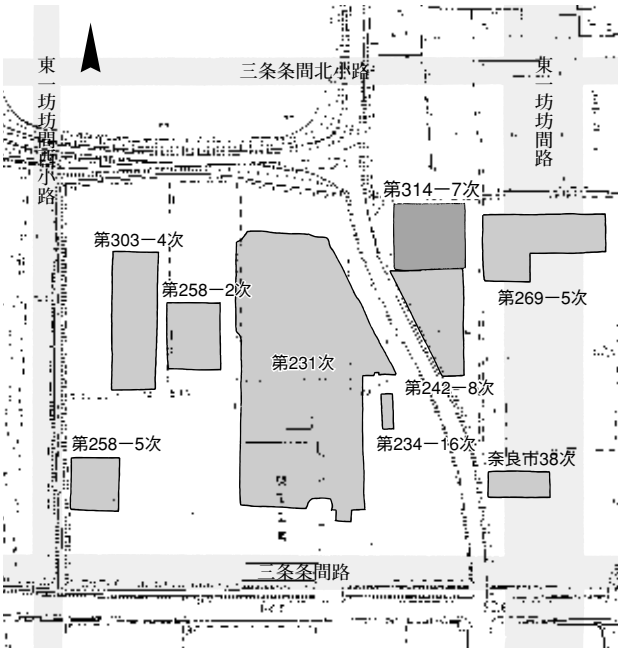

図122　第314－7次調査区位置図

図123　調査区全景（南東より）

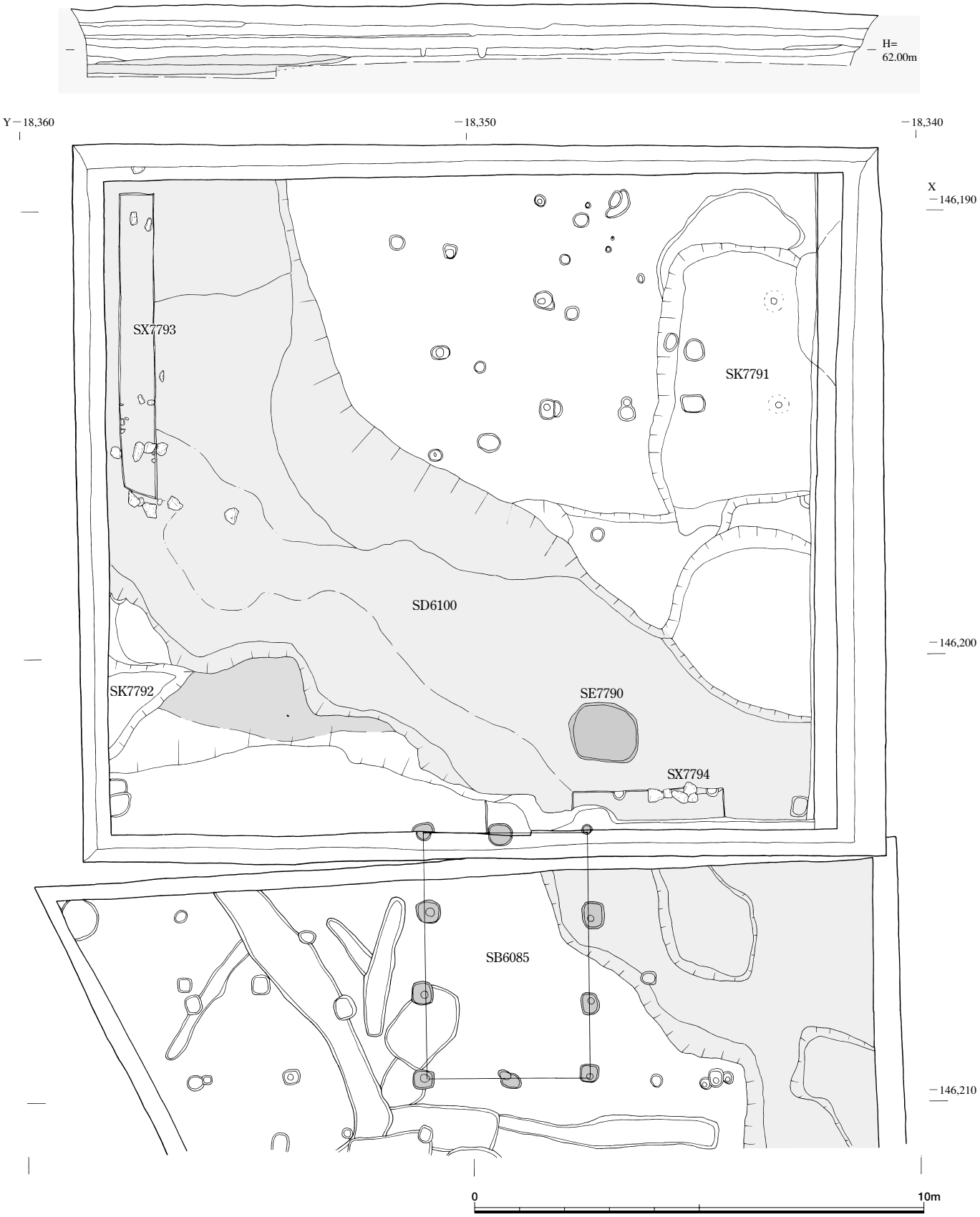

図124　第314－7次遺構平面図・北壁断面図　1：120

図125　SE7790基底部検出状況（北より）

基底部には、長径65㎝、短径45㎝、高さ25㎝の楕円形の曲物を埋め，上辺に高さを揃えて両端に仕口をつくった棒材を方形に組み囲んだのち、曲物と枠木の間に平瓦の破片を敷きつめている（図125）。曲物内からは、横櫛が１点出土した。

井戸枠内下層出土の土器には平城Ⅲのものが含まれ、廃絶後に上面に落ち込んでいた土器はSD6100と同様平城Ⅳ・Ⅴのものである。また、ヒノキの井戸枠板材の１点について年輪年代測定をおこない、樹皮型で744年という伐採年が得られた。

SK7791　調査区東北部で検出した南北5.8m、東西3.5m以上、深さ25㎝の楕円形の土坑である。埋土中からは奈良時代から平安時代にかけての土器が出土した。埋土完掘後、底面西辺において柱穴を検出した。

SX7793　調査区西辺にそって検出した南北方向の石列。SD6100基底部の砂層中で一部を検出し、断割調査により北方へと連続することを確認した。

SX7794　調査区東南部で検出した東西方向の石列。SD6100上面において石列および抜取穴を確認した。SB6085の柱穴検出面よりも下層に位置する。

表14　第314－7次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6282	Bb	1	6681	?	1
6308	Aa	1	6691	B	2
6316	C	1	6721	C	1
	Da	1		F	1
			型式不明		1
軒丸瓦計		4	軒平瓦計		6

	丸瓦	平瓦	磚	その他	
重量	29.1kg	118.2kg	2.2kg	二彩平瓦	1
点数	378	1257	3	緑釉平瓦	1

4　出土遺物

遺物は、奈良時代のものを中心として、遺物包含層およびSD6100埋土より多量に出土した。

土器・土製品は、奈良時代の土師器、須恵器を中心にコンテナ17箱分が出土した。このなかには「十」「研」「供」などの墨書土器15点、転用硯16点、円面硯、漆付着土器、土馬片がある。

瓦は小片が多いが、軒丸瓦４点、軒平瓦６点に加え、二彩・緑釉平瓦が出土した（表14参照）。

木製品には、SE7790の底から出土した横櫛、上層より出土した木簡、斎串状製品などがある。この他に特殊な遺物として、鼈甲の破片がSD6100より１点出土している。

5　まとめ

今回の調査では、調査区内の大半をSD6100の流路が占めるため、遺跡の利用状況などについては必ずしも明確ではない。墨書土器、硯、漆付着土器、土馬、施釉瓦の出土に、第242－8次調査の成果と共通するありかたが認められ、坪東辺の性格を何らかのかたちで反映したものと考えられる。左京三条一坊七坪は、小規模な建物が多い、建て替えが少ない、建物の密度が低い、というこれまでの調査成果から、貴族の邸宅ではなく、京内の官衙的施設が所在したものと推定された。そして平安京における位置関係、あるいは奈良時代前半の遺構が希薄であることなどを根拠に、大学寮に比定されているが、いまだ十分な判断材料は得られていない。図122に示したように、本坪は平城京内でも調査の蓄積された地域であることから、坪内の土地利用あるいは性格についての検討をさらに深めていく必要があろう。　（次山　淳）